我宗に於て如何に重要な問題となつたかに注意し、而して鎭西は、一枚起請の形式に依て、一宗の要義を記主に相傳されたのであらふと云ふことを考へて見たいと思ふたのである。

阿含物語

梅村舜道

一

是の如きを我れ聞きき。一時釋迦牟尼佛王舍城に在しぬ。時に尊者あり淨天と曰ひき。鞞提訶國に在りて人間を遊行して彌絺羅城菴羅園中に至りぬ。時に尊者淨天晨朝に衣を著け鉢を持し彌絺羅城に入りて乞食し、次第に乞食して自らの本家に到りぬ。時に淨天の母年老いて中堂に在り、食を持ちて火を祀り、梵天に生せんことを求め、尊者淨天の門外に在りて立つことを覺えず。時に毘沙門天王尊者淨天の所に於て極めて敬信を生ず。時に毘沙門天王諸の夜叉を導き從へ、虛空に乘じて行き、尊者淨天の門外に在りて立ち、又其母の手に飲食を擎げ、中堂の上に在りて、供養して火を祀り、其子の門外に在りて立つを見ざることを知り。見已りて空中より下り、淨天の母の前に至

り、而して偈を說きて曰はく。

此の婆羅門尼よ　　梵天は極めて遠遠なり
彼處に生ぜんと求むるが爲めの故に
此の所に於て火を祀るは　此れ梵天の道にあらず
何すれぞ徒らに此の所に祀りを爲すや
汝婆羅門尼よ
淨天門外に住てり
垢穢永く除きて餘り無し
是れ則ち天中の天なり
肅然として所有無く
獨一にして資けを兼ねず
食を乞はむがために舍に入れり
供養に應ずべき所の者なり
淨天は善く身を修む　人天の良福田なり
一切の惡を遠離して　染のために染せられず

德梵天に同うして　形人間に在りて住すれども
一切の法に著せず　彼の淳熟の龍の如し
比丘の正念に住して　其の心善く解脫せり
應に初佛を以て奉るべし
是れ則ち上福田なり　應に正信心を以て
時に及んで速かに施與せよ
當に建立洲に預りて　未來をして安樂ならしむ
汝此の牟尼を觀よ　已に苦海の流を渡る
是の故に當に信心をもつて
時に及むて速かに施與すべし
當に建立洲に預りて　未來をして安樂ならしむ
毘娑門天王彼を開發して捨てしめぬ。
時に尊者淨天、卽ち其の母の爲めに種々に法を說き、敎を示し、闇きを照らし喜ばしめ已つて道に復つて去りぬ。(縮辰二、藏阿四)

× × × ×

今私に惟ふに、天の思想及び實在觀は、印度の思想界には最も古くより存し、佛在世に是の信念は愈々固く、亦佛陀御自身も此を認め玉しこと明にして諸説を擧ぐるに遑あらず、右の物語りに依りて、佛弟子の淨天すら毗娑門天深く此を敬信せり、況や佛陀世尊をや、「人天の大師」其名人を欺かず所説分廣と謂つべきなり。

二

是の如きを我聞きゝ。一時佛王苦城迦蘭陀竹園に住しき。爾の時尊者羅睺羅佛所に往詣して頭面に足を禮して却つて一面に住して佛に白うして言さく。世尊我が此の識身及び外の境界一切の相をして、能く我、我所見、我慢をして繫著なからしむること、云何が知り、云何が見んや。佛、羅睺羅に告げたまはく、善い哉、善い哉、能く如來に問へり。我が此の識身及び外の境界一切の相、我、我所見、我慢をして繫著せしむること有ることなからしむるは、云何が知り、云何が見るやと。羅睺羅、佛に白うて云はく、是の如し、世尊。佛、羅睺羅に告げたまはく、善い哉、諦に聽け、諦に聽け、善く之を思念せよ、當に汝が爲めに説くべし。羅睺羅、當に觀ずべし若しあらゆる諸の色、若しは過去、若しは未來、若しは現在、若しは內、若しは外、若しは麤、若しは細、若しは好、若しは醜、若しは遠、若しは近、彼の一切悉く皆我に非らず、我に異るにあらざる不相の在なり、平等慧の正觀は是くの

如きなり。是の如く、受想行識、若しは過去、若しは未來、若しは現在、若しは內、若しは外、若しは麤、若しは細、若しは好、若しは醜、若しは遠、若しは近、彼の一切悉く皆、我に非らず、我に異るにあらず、不相の在なり、平等慧如實の觀は是の如し。是の如く、羅睺羅よ、比丘あり、是の如く知り、是の如く見ん、是の如く知り、是の如く見る者は、此の識身及び外の一切の境界、一切の相に於て、我、我所見、我慢をして繫著せしむること有ること無かるべし。比丘若し是の如く、此の識身及び外の境界、及び一切の相に於て、我、我所見、我慢をして繫著せしむること無くんば。比丘は是れ、斷愛欲、轉去諸結、正無間等究竟苦邊と名づく。

時に羅睺羅、佛の所說を聞きて、歡喜奉行しき。

私に曰はく。佛の所說の如くんば、我が色受想行識の五蘊の身、及び外の一切の境界は、是れ非我、不異我、不相の在と宣へり。若し此の不相の在を透見すれば、大乘に說く、無相眞實の大道を開發すべし、大小は唯機根に依るべし、法に大小無く、解に大小あり、獨の聖者ニャナチロカ氏に和す。

三

是の如きを我れ聞きゝ。一時佛、王舍城の迦蘭陀竹園に住しき。爾の時尊者舍利弗、耆

闍崛山中に在り。時に長者の子あり。輸屢那と名づく。日々遊行して耆闍崛山に到り。尊者舍利弗に詣でゝ、起居を問訊し已りて、却つて一面に坐して、舍利弗に語りて言はく。若し沙門、波羅門、無常の色、變易、不安隱の色に於て、我れ勝り、我等し、我劣れりと言ふ、何が故に沙門、波羅門是の如きの想を作して而も眞實を見ざるや。若し沙門、波羅門、無常變易不安隱の愛想行識に於て、而も我れ勝れり、我れ等し、我れ劣れりと言ふ、何が故に沙門、波羅門是の如きの想を作して、而も眞實を見ざるや。若し沙門波羅門、無常の色、不安隱の色、變易に於て、我勝れり、我れ等し、我れ劣れりと言ふて、何の計する所に依りて而も眞實を見ざるや。無常變易不安隱の受想行識に於て、我れ勝れり、我れ等し、我劣れりと言ふて、何の計する所ありて而も眞實を見ざるや。舍利弗の曰く輸屢那汝が意に於て云何ぞ。色は常と爲すや。無常と爲すや。答へて曰く無常なり。輸屢那よ若し無常なりとすれば是れ苦なりと爲す耶。答へて曰く是れ苦なり。輸屢那よ若し無常苦ならば是れ變易の法なり。意に於て云何ぞ、聖弟子中に於て色を見るに、是れ、我、異我の相、在るや、否や。答へて曰く、不なり。輸屢那意に於て云何ぞ、受想行識常と爲すや、無常と爲すや。答へて曰く、無常なり。若し無常ならば是れ苦なりや。答へて曰く是れ苦なり。輸屢那よ。識若し無常苦ならば是れ變易法なり。意に於て云何ぞ、聖弟子中に於て識を見るに、是れ我、異

我の相在るや、否や。答へて曰く、不也。輸屢那當に知るべし。色、若しは過去、若しは未來、若しは現在、若しは內、若しは外、若しは麤、若しは細、若しは好、若しは醜、若しは遠、若しは近、彼の一切の色、是れ我ならず、我に異らず、不相の在なり。是を如實知と名づく。是の如く、受想行識、若しは過去、若しは未來、若しは現在、若しは內、若しは外、若しは麤、若しは細、若しは好、若しは醜、若しは遠、若しは近、彼の一切の識、是れ我ならず、我に異ならず、不相の在なり、是を如實如と名づく。輸屢那よ、是の如く色受想行識に於て、厭ひを生じ、欲を離れて解脫し、解脫の知見あれば、我が生已に盡き、梵行已に立ち、所作已に作して、自ら後有を受けざるを知る。時に舍利弗是の經を說き已るに、長者子輸屢那、塵を遠かり、垢を離れ、法淨眼を得たり。時に長者子輸屢那、法を見、法を得て他に由らず、正法の中に於て無所畏を得たり。座より起ちて偏袒右肩し、胡跪合掌し、舍利弗に白うして言はく、我れ今已に度る、我れ今日より、佛に歸依し、法に歸依し、僧に歸依して優婆塞となる。我れ今日より已に壽命を盡くして、淸淨に三寶に歸依す。

時に長者子輸屢那、舍利弗の所說を聞きて、歡喜踊躍して、禮を作して去りぬ。

四

是の如きを我れ聞きゝ。一時佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に住しぬ。爾の時に世尊諸の

比丘に告げ玉ひき。色は是れ我にあらず、若し色是れ我ならば、色は病苦に應せず、生亦色に應せず、是の如くせしめむと欲して、是の如くせしめず、色我無きを以ての故に、色に於て病あり苦あり、生亦色に於て得たり是の如くせしめんと欲して、是の如くせしめず、受想行識亦復是の如し。比丘よ意に於て云何ぞ、色は是れ常なりや、無常なりや。比丘佛に白さく、無常なり世尊。比丘よ、若し無常ならば是れ苦なりや否也。比丘佛に白さく、是れ苦なり世尊よ。佛の云く若し無常苦ならば是れ變易の法なり、多聞の聖弟子、中に於て寧ろ我、異我の相の在るを見るや否や。比丘佛に白さく、否也世尊。佛の云く受想行識亦復是の如し、是の故に比丘、あらゆる色、若しは過去、若しは未來、若しは現在若しは內、若しは外、若しは麤、若しは細、若しは好、若しは醜、若しは遠、若しは近、彼の一切、我に非らず、我に異るにあらざる、不相の在なり。是の如く受想行識を觀察するに亦復是の如し。比丘、多聞の聖弟子、是の五受蘊に於て、我に非らず、我所に非らざるを實の如く觀察せよ、如實に觀察し已らば、諸の世間に於て、都て取る所無し。取る所無きが故に、着する所無し、着する所無きが故に、自ら涅槃を覺る、我が生已に盡き、梵行已に立ち、所作已に作し、自ら後有を受けざることを知る。佛此經を說き已りたもふに、諸の比丘佛の所說を聞きて、歡喜奉行しき。

五

是の如きを我れ聞きゝ。一時佛拘薩羅に在して人間に遊行したまへり。從迦帝聚落、墮鳩羅聚落有り、二村の中間一樹下に坐して、盡正受に入り玉へり。時に豆磨種姓婆羅門有り。彼の道に隨つて行き、佛の後を尋ねて來り、佛の脚跡の千輻輪相印文顯現し、齊輻圓輞、衆好滿足せるを見る。見已りて是の念を作さく、我未だ曾て人間に是の如きの足跡有るを見ず、今當に跡に隨つて以て其の人を求めむと。卽ち脚跡を尋ねて佛所に至り、來りて世尊の一樹下に坐して、盡正受に入り玉ひ、顏容世に絕え、諸根澄靜に、其心寂靜にして、第一調伏、正觀成就し、光相巍巍として猶ほ金山の如くなるを見る。見已りて白うして言はく。是れ天と爲すや。佛婆羅門に告け玉はく、我は天に非らざる也。（婆羅門云）龍夜叉乾闥婆阿修羅迦樓羅緊那羅摩睺羅迦人非人等と爲ずや。佛婆羅門に告げ玉はく。我は龍乃至人非人にあらざる也。婆羅門佛に白さく、若し天に非らず、龍に非らず、乃至人にあらず、非人にあらざれば、是れ何等と爲すや。爾の時世尊偈を說きて答へて言はく。

天龍乾闥婆　緊那羅夜叉　無害の阿修羅
諸の摩睺羅伽　人の非人等と

悉く煩惱より生ぜり

是の如き煩惱の漏は　一切我れ已に捨てぬ

已に破り已に磨滅せり　芬陀利の生ぜるが如し

水中に生ずと雖へども　未だ曾て水に著せず

我世間に生ずと雖へども

爲めに世間に著せず

歷劫常に選擇するに　純苦にして暫くも樂なし

一切有爲の行にして　悉く皆生滅の故なり

垢を離れて傾動せず　已に諸の劔刺を拔き

生死の際を究竟せり　故に名づけて佛陀と爲す。

佛此の經を說き已り玉ふに、豆摩種婆羅門佛の所說を聞きて歡喜隨喜し、路に從うて去りぬ。(雜阿五)

六

是の如きを我れ聞きゝ。一時佛拘薩羅人間に在りて遊行し、一那羅聚落に至り、一那羅林中に住し玉ひき。爾の時世尊、衣を著し、鉢を持し、一陀羅聚落に入りて食を乞ひ玉

へり。而も是の念を作し玉はく、今日大に早し、今且らく耕田婆羅豆婆遮婆羅門を過ぎて飲食の處と作すべしと。爾の時耕田婆羅豆婆遮婆羅門五百具の犁をもつて田を耕し、爲つて飲食をなす。時に耕田婆羅豆婆遮婆羅門遙に世尊を見て白して言はく、瞿曇我今田を耕し、種を下して以つて飲食に供ふ、沙門瞿曇も亦應に、田を耕し種を下して以て飲食に供へよと。佛婆羅門に告げ玉はく、我亦田を耕し種を下して以て飲食に供ふと。婆羅門佛に白さく、我は都べて沙門瞿曇の若しは犁、若しは軛、若しは鞅、若しは鑱、若しは鞭、を見ざるなり、而も今瞿曇說きて言はく、我亦耕田下種して以て飲食に供ふと。爾の時耕田婆羅豆婆遮婆羅門卽ち偈を說きて言はく、

自ら耕田者なるを說けども
而も其の耕すを見ず
我が爲めに耕田を說き
我をして耕法を知らしめよ
爾の時世尊偈を以て答へたまはく
信心を種子と爲し　苦行を時雨と爲し
智慧を犁軛と爲し　慚愧心を轅と爲し

正念自ら守護すれば　是れ則ち善御者なり
身に意業を包藏し　食處を知りて內に藏す
眞實を眞乘と爲し　樂住を懈息と爲す
精進にして廢荒無く　安隱にして速に進む
直ちに往きて轉還せず　無憂の處に到ることを得
是の如き耕田者は　甘露の果を逮得す
是の如き耕田者は　還た諸有を受けず

時に耕田婆羅豆婆遮羅門佛に白うして言はく、善耕田の瞿曇、極善耕田の瞿曇と。是に於て耕田婆羅豆婆遮婆羅門世尊の說偈を聞きて、心に轉た信を增し、鉢に滿てる香美の飲食を以て世尊に奉るに、世尊受けたまはず、說偈に因つて得るを以ての故に、卽ち偈を說きて言はく

法を說くに因らざるが故に
彼の食を受けて食ふ
但他を利益せむがための故に
法を說きて食を受けず

是の如く廣く說き玉ふこと、前の火與婆羅門の爲めに廣く說き玉ふが如し。時に耕田婆羅門佛に白して言さく。瞿曇今此の食を以て何處に安著すべきやと。佛婆羅門に告げたまはく、我は諸天魔梵沙門婆羅門天神世人も此の食を食して身を安んずるに堪へたるを見ざるなり。汝此の食を持ちて虫無き水中、及び少く草を生ずる地に著けよと。時に婆羅門卽ち此食を持ちて虫無き水中に著くに、水卽ち煙となりて起ち、涌沸して啾啾と聲を作すこと、熱丸を以て冷水に投ずるに啾啾として聲を作すが如し、是の如く彼の食を、投じて無蟲の水中に著くに煙り起りて涌沸し啾啾として聲を作す。時に婆羅門是の念を作さく、沙門瞿曇は實に奇特と爲す、大德大力にして乃ち飲食の神變をして是の如くならしむと。時に彼の婆羅門食の瑞應を見て、信心轉た增し、佛に白うて言さく、我今正法中に於て出家して具足を受くることを得るや否やと。佛婆羅門に告げたまはく、汝今正法中に於て出家して具足を受け比丘分を得べしと。彼卽ち出家し已る。獨り靜かに思惟するに、族姓の子たる所以をもつて、剃除鬚髮して袈婆衣を著け、正信非家にして出家學道し、つひに阿羅漢を得て、心善く解脫せり。(雜阿四)

今私に曰。佛力の甚深之を以つて知るべし、佛德の廣大唯靜に思量せよ、三乘は佛善巧の慈悲唯一佛乘あり。形容を以て佛を見るべからざるも而も相貌古今に超絕し、恠奇を以て世尊を知るべきにあらざるも、而も神妙不可計なり。